屍たちの鎮魂歌

青色一號

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
屍たちの鎮魂歌

【Nコード】
N7259Y

【作者名】
青色一號

【あらすじ】
地方都市、中野原市に住むオタクな高校生。浦島秀明はある日、自宅の押入れから祖父の猟銃を見つける。その日、世界は終末の時を迎えた・・・。突如街中に現れたゾンビの大群、全てが血に染まった世界。秀明たちははたして生き残ることができるのか?

NO．1　最後の日の夜

ある日の朝、俺はいつもどおりに目が覚めた。
やかましく耳元で鳴る目覚まし時計を、布団から手を伸ばして止めた。

カチッ

「・・・・・・・・・・。」

布団から起き上がった俺はメガネを取り、気がつくとアニメの美少女キャラの抱き枕を抱いていた。

そう、俺はオタクだ。

俺は浦島秀明（うらしまひであき）、しがない平凡な高校生にして二次元美少女と銃器が大好きなオタクだ。

地方都市郊外の田舎町、中野原市美空町に住んでいる。回りを山に囲まれ自宅の周りには田畑が広がり、近くに雑貨とたばこを扱うだけの小さな商店があるのみ・・・。

俺の家は父さんの実家で、両親は俺がまだ幼い頃に不慮の事故で亡くなり、以来俺は生まれ育ったこの家で、唯一の俺の保護者である祖父に育てられた。
祖父が農家をやっているということで俺は大きな家に住んでいる。

畳十条和室の大きな部屋の棚には、いろいろなアニメやゲームの美少女キャラのフィギュアが並び、部屋の戸には俺の大好きなアニメ「魔法少女まじかるマリンちゃん」のポスターが貼ってある。
マンガ本の棚の横にはＡＫ４７カラシニコフ銃の改造モデルガンとボウガンが立てかけてあって、それがある以外はごく普通の今時の男子高校生の部屋といった感じだ。

身体がすごくだるい、それもそうだ。このところずっと徹夜でギャルゲーをプレイしていたのだから・・・。

俺はふとため息をついた。

「・・・・・さて、学校逝くか。と、その前に餌やりやらねーとな」

だるい、そしてだるい。果てしなくだるい。
玄関の戸を閉め外に出て俺は玄関の前にカバンを置き、鯉のえさの袋とニワトリの餌をを持って庭の方へと向かうとそこには大きな石灯籠があり、その横には池があった。
池の中には色とりどりの錦鯉達が泳いでおり、その鯉たちは俺を見るなり水面から口をパクパクさせて俺の方に群がってきた。

「はいはい、いま餌やるからな～」

小さな石の橋の上から餌を撒くと、鯉たちは一斉に群がって餌を食らった。
鯉の餌やりは俺の毎朝の日課であり、朝のちょっとした楽しみでも

ある。
「まったく、気楽なもんだなぁお前らは・・・・・俺も来世は鯉に生まれたいもんだぜ」
まったくこいつらときたら、ただ口を馬鹿みてェにパクパクさせてただ餌を食らったあとは何処へ行くわけもなく、ただこの池の中をぐるぐると泳ぎ続け、そして糞を漏らす。
まるで俺の日常そのもののように思えてきた。
次に俺は玄関横の犬小屋で飼っている二匹のニワトリにも餌をやった。
この二匹のニワトリは俺のペットで、名前は唐揚げ、もう一匹は手羽先という。
餌のケースに餌を入れると、唐揚げと手羽先は鯉たちと同様に貪るように餌をついばんでいた。
しかし終に餌の袋がカラになり、俺はストックの餌を取りに自宅裏の倉庫に向かった。

「相変わらず汚ねぇなー・・・・父さん死んでから掃除してねーんじゃねのかな・・・・？」
ぶつぶついいながら餌の袋を探していると、突然俺の頭上に細長いボロボロのダンボール箱が落っこちてきた。
「痛ッてェ！！くそ・・・・なんだよこのガラクタはー！！」
俺は思わずその箱を開けて中身を見た瞬間絶句した。

箱に入っていたのはなんと上下二連の猟銃らしきものだった。銃好きの俺は思わずその場で銃を手に取り、石灯籠に向かって銃を構えたりして遊んでいた。

「すげぇー！！上下二連の散弾銃だ！！こんなのどこのモデルガンのメーカーでも作ってねーぞｗｗ」

俺はしばらく銃を振り回してハイテンションになっていた。

しかしニワトリの餌のことを思い出し、俺はすぐに銃を元の箱に仕舞うとそのまま箱を自分の部屋の押入れに持っていって隠した。

その後すぐに餌を持っていってニワトリたちに与えた。

そしてまた二匹のニワトリは餌をついばむ。その様子を見ながら俺はふと空を見上げた。

「はぁ・・・・・眠ィ。」

下らないことを考えた。俺はカバンを取りに玄関へと戻った。

ちょうどそこへ朝の散歩から祖父が帰ってきた。

「秀明、もう学校行く時間かい？」

「ああ、じいちゃん～おかえり！そんじゃ逝ってきますー。」

「気をつけていってておいで！」

祖父は昔から俺を溺愛してくれてて、それはありがたいことでもあるがそれがかえって少し迷惑に思っていた。

家を出て俺は一人通学路をとぼとぼと重い足取りで歩いていると。
そこへ同じクラスの俺の幼い頃からの友達の滝川昴（たきがわすばる）が、俺を見つけて駆けつけてきた。

「おはよう秀明ー、」
「滝川おはよう・・・・」
「相変わらずお前顔色悪いな、なぁ・・・・お前なんでいつもそんな死んだ魚みたいなやる気のなさそーうな目つきしてんだ？」
「生まれつきだよ、だから何だよ？・・・・」
「また徹夜でギャルゲーか？」
「何故バレたし！？」
「分かるわそのぐらい！何年つるんでると思ってんだ」
「はいはい・・・・」

目の前を同じ学校の女子が通っていくのが見え、それを見た滝川はそれに反応していた。

「おおっあの子すげぇ胸おっきかったなぁ！！」
「はいはい・・・・」

俺は呆れた顔で滝川を見た。まったくのん気なヤツだぜ・・・・。
まぁ、俺も人のこと言えた義理じゃねーけどよ、

「なんだよその顔は！お前は何も感じないのか！！」
「俺は三次元には興味ねーよ、というか前にも言ったろ。」
「あぁ、そうだったなぁ・・・」

俺がそう言うと滝川はため息をついた。すると後ろから俺らの幼馴染の宮藤茜（みやふじあかね）が走ってやってきた。

「おーす！二人ともおはよう！」
「おはよう、宮藤」
「よう宮藤・・・グッドモーニングなう・・・」
「滝川、秀明どうしたの？」
「徹夜でギャルゲーやって今朝は調子悪いんだとさ」
「またのHなゲームやってるの？」
「別にいいだろうが、誰にも迷惑かけてるワケじゃねーんだから」
下らない話を続け、俺と滝川は学校についた。しかしこの高校、女子率が多く俺たちのクラスの半分が女子だからこの上なく気まずい。
俺と滝川は席に着いた。俺は窓側の自分の席に突っ伏していた。
滝川は俺の席の隣に座り、俺は一人寝そべりながら窓の外を眺めた。

「あー、すげぇ眠い。果てしなく眠い。」
「そりゃそうだろ、徹夜でぶっ続けでギャルゲーやってたんだから」
「たしかに昨晩はかなりハマりすぎて切り上げるタイミングが途中で分からなくなってから・・・途中で意識が・・・」
「お前かなりヤバイぞ？流石にエロゲ中毒進行しすぎうだろが」
「まぁ自分でも少し自重しようと努力はしているんだがなぁ・・・」

「それって、明日から本気出すっていって結局三日坊主になるのとあまり変わらないぞ？」
「やっぱりか？まぁ、どうせそれが直ったところで何がどうなるってワケじゃねーしな」
「お前ホントにアンバランスな奴だなぁー・・・・まぁ昔っからお前はそういう奴だったな」
「まぁな！」

するとなにやら教室の黒板側の辺りがやけに騒がしかった、見てみるとクラスの男子連中が騒いでいる様子だった。

それもそのはず、クラスメイトで学園一の美少女。城ヶ崎嘉穂（じょうがさきかほ）のお出ましだ。

ストレートの長い黒髪を靡かせて彼女は颯爽と教室に入ってきた。
しかしまぁ三次元に興味のない俺でもたしかに可愛いと思った。
でも見かけによらず若干高飛車な性格で、今まで何人の男子が告って彼女にフラれてことか。なにしろ彼女のファンクラブまで存在する始末。まぁぶっちゃけ俺には関係のない話だ。

「皆さん、ごきげんよう」
「おはようございます！嘉穂さま！」
「嘉穂さま！」

彼女は無言で一人の側近？（男子）にカバンを差し出すと、側近君は膝をついてカバンを受け取り、周りの男子連中も続いて彼女に媚を売る。

「疲れたわ・・・・」
「嘉穂さま！どうぞお座りください！」
「あら、気が利くわね。何だか肩もこるようだけど・・・・」
「嘉穂さま！僕が揉んで差し上げます！」

やれやれ、コイツらときたら・・・・・まったく。
俺は呆れた表情でそいつらを見た、なんでそこまで三次元に必死になれるのかまったく理解しかねる。俺のクラスの男子連中の殆どが城ヶ崎のファンクラブの会員で間違いねーな。
しかしコイツら、俺が見ている限りでは城ヶ崎の奴に良い様に利用されてるだけだし、まったく最近のスイーツはやることが違う。
ちなみに俺は元からファンクラブなんぞに入る気などさらさらなかったし、クラスでの存在は殆ど目立たない地味な立場なので利用されずに済んだけど、終いにはクラス全員の男子を手玉に取るつもりなのか？

フッ、しかし甘いぞビッチマン！！三次元なんぞにこの俺様が貴様の言いなりになると思ったら大間違いだぜ！！フハハハハーッ！！
俺は心のそこでそう呟き、高笑いを上げた。そして不適な笑みを浮かべて彼女の方を見つめた。

「まったくなによ〜！ちょっとかわいいからっていい気になってぇ〜！」

おーっと？なにやら俺の隣の班のメガネをかけたキモデブ腐女子、樫原信子（かしはらのぶこ）。別名、ブタ原が突然独り言を呟きはじめたぞ？
樫原はクラスのスイーツ腐女子グループの親玉でオマケにＢＬ好きの釜堀りマスター、俺はコイツが嫌いだ。

何故嫌いなのかといえば、先ず一つ目に俺はＢＬが嫌いだ。それにコイツは他のクラスの女子にもＢＬ（通称、Ｔウイルス）をばら撒いて感染者を増やしてやがるんだ！！
オマケにコイツ、アニメのＢＬだけでは飽き足らずクラスの中の良い同士の男子を腐妄想のオカズにしているそうで、俺と滝川もその被害者だ。
偶然、橿原の妄想キモキモ話をクラスの女子と話しているのを聞いてしまい、それ以来俺は差別の眼差しでヤツを見るようになり、ＢＬを毛嫌いするようになった。

ちなみに俺はヤツに対抗して百合萌え一筋だ。

彼女が席に着いたところで教室に先生が入ってきたので、周りにいた男子連中は木の葉を散らすように自分の席に付いた。

「出席を取るぞー！全員席につけー」

こうして当たり前のような日常が続いてゆくものだと俺は思っていた・・・。
このときまでは・・・・・。

世界はこのとき既に俺たちの知らないところで崩壊を始めていた。
しかし俺はそんなこと知る由も無く、ただ一人休み時間に学校の屋上で缶ジュースのゲロ甘コーヒーを飲みながら仰向けになり空を眺めていた。

青空の中に流れる雲を俺は死んだ魚のような目で見つめていた。

「まったく・・・・どいつもコイツも・・・・。」

まったく今の世の中ろくでもないことばかりだ。政治家どもは己の欲望を満たし、金にモノを言わせる。そして毎週日曜の昼過ぎのテレビでは必ず特定のチャンネルでやっている障害者特集。ぶっちゃけうざい。媚を売り同情を買わせて偽善者を増やすだけのただのクソ番組だ。まったく土日の午後はろくな番組がやってねェ・・・。

別にテレビの話をしてるんじゃない。俺はそんな世の中、メディアに失望しているんだ。

おまけに学校ではスイーツと腐女子、ホント頼もしいよ。

所詮、この世界にあるのは理屈と幻想。期待するだけ無駄なことが多い・・・・だから俺はあまり世の中に期待しなくなった。するだけ無駄なんだよ・・・。

「よう秀明ー、ここにいたか！」

「あ？なんだ滝川か」

そこへ滝川がペットボトルのお茶を持ってやってきた。

滝川も俺の隣に仰向けになって空を見た。

「今日は良い天気だな」

「だからー？」

俺は興味なさげにそう答えた。

青空を流れる雲は、少しずつ形を変えながら変化してゆく。もともと雲なんて水蒸気かなんかの集まりで、科学的にどうのこうのってヤツだろう・・・・・それがただ空に浮いて流れているだけの話さ。

「それだけさ・・・・・・」

「そうか、なぁ・・・・・滝川よ・・・・」

「何だ？」

「だるいし次の授業サボらねぇ？」

「俺は別に構わんが、お前は成績ヤバいから出ないとダメんじゃねーのか？」

「うーん・・・・まぁそんなんだけどさ、なんかもう面倒くさくなっちゃってよ・・・・・」

「※ブタ原のことか？・・・・気持ちは分かるが、でもこのままだとお前確実に留年だぞ？」

「そうか・・・・・そりゃ愉快だな」

「愉快じゃねーだろｗｗ」

飛行機雲が流れる空を見ながら俺と滝川が下らん話をしていたところへ、突然宮藤がやってきた。

「あー二人ともやっぱりここに居たかー！もう授業始まっちゃうよ？」

「なんだ宮藤か、何用かな？」

「それじゃ秀明、俺先に教室戻るわ！」

「おう、頑張ってこいよ～」

「アンタもくるのよ！！」

ゴチンッ！！

宮藤の鉄拳炸裂、おかげさまで俺の頭には大きなたんこぶが出来ました。

やってくれるねェ～、宮藤さん。まぁコイツは幼稚園の頃からの付き合いなんでスイーツ呼ばわりするのは失礼に値するので一応特別な名前で呼んでおります。

狂気神姫（マッド・プリンセス）

しかしそれを本人に言えば間違いなく俺は殺されるので心の奥底に深く沈めておきましょう。

その後、俺は宮藤に言われるがままに授業に出た。まぁ、出たとはいっても殆ど窓の外をボーっと眺めたり教科書やノートの端にパラパラ漫画を描いたりして過していただけなので、もちろん授業には参加しているようで参加はしていないのだ！

眠気が限界に達した頃、その眠気を吹き飛ばすように授業終了のチャイムが鳴り渡った。

ホームルームが終わり、俺はカバンに持ってきた漫画雑誌だけを入れてほかの教科書やノートは机の引き出しに入れた。

「秀明、いっしょに帰ろうぜ」

「あぁ」

俺と滝川が教室を出ようとしたとき、教室に城ヶ崎が走って戻って

きた。どうやら忘れ物でもしたのだろうか？すると彼女は机の脚に引っかかりそのまま転んでしまった。
その時偶然か俺と城ヶ崎の目が合い、俺はすぐに目を背けて相手にしないように教室をさっさと後にした。
やべェ！！スイーツと目が合った！！怖い！！俺もアイツに利用されるのか！？
勝手に自分の中で自意識過剰になりすぎていた、まぁありはしないことだろうけど・・・。
俺と滝川は下駄箱で上履きを履き変えていると、後から宮藤が後からやってきた。

「ちょっとー！二人ともおいていかないでよー！」
「あれ宮藤、お前今日当番か？」
「いやぁさぁ、古文の西岡に捕まっちゃって荷物運び手伝わされちゃってたの！」
「アイツに関わるとろくなことねーからなぁ・・・・」
「それじゃあ帰ろうぜ」
「おい待てよ！滝川！」
「ちょっと二人ともいきなり走んだいでって！」
「早くこいよー！」

こうしていつもの日常がいつもどおりに終っていた。
しかし、これからまさか本当の終わりというものが始まろうとは誰もまだこの時までは知る由もなかった・・・・。

その日の夜、俺はいつもどおり居間で祖父といっしょにテレビを見ながら晩飯を食べていた。
相変わらず最近のテレビのバラエティー番組は面白くない・・・・芸能人の恋バナばっかかり、チャンネルを回しても他に面白い番組もやっていない。

俺はため息をついてリモコンを置き、仕方なく面白くもないそのバラエティー番組を見ていた。

「っち！・・・・・くそ番組ばっかり・・・・・」
「どうした秀明、なにか学校で嫌なことでもあったのか？」
「えッ？あッいや・・・・なんでもないよじいちゃん」
「そうか、それならいいがな・・・・ホレ、はよ食わんと飯が冷めちまうで？」
「分かってるよ！」

この番組早く終らねーかな？いつになったら最終回迎えるのだろうと考えていたときだった。
突然、テレビ画面の上にニュース速報が流れてきた。

ピローンピローン♪

～NNSニュース速報～　今日7時頃、東京都西新宿で交通事故、タンクローリーが大爆発、１１人が死亡。２６名が意識不明の重体。
テロップが流れてからしばらくすると、突然テレビの画面がニュースに変わった。

「～えー番組の途中ですが、ここで臨時ニュースをお伝えします！今日7頃、東京都西新宿一丁目のヨトハシ百貨店前で車両数台を巻き込む事故があり、右折しようとしたタンクローリーが爆発炎上し、11人が死亡、26名が意識不明となる事故が起こりました。～」

「何だぁ？」

「東京の方でまた事故だとさ・・・・この間も人身事故がニュースになってたみたいだけど」

しかしおかしい、最近はこんなニュースばっかりだ。この前は桜木町で電車の横転事後がニュースになったばかりなのに、ここ最近本当におかしい・・・・。

俺は晩飯を食い終わると、食器を流しに持っていくとそのまま自分の部屋に戻ってパソコンを立ち上げた。

「さてと・・・・板の様子でも覗いてみますかな」

某掲示板サイトを開くと、なにやら様子がおかしいことに気がついた。

164　名前：名無しのジョニー　20××／4／15（Tue）
　17：44　ID：eyUU6qrXSnI
吉祥寺で傷害事件発生中！カップルが襲われてざまぁwwww

165　名前：名無しの必殺仕事人　20××／4／15（Tue）

１７：５４　ＩＤ：ｇｌ１ｘｗＧｘｙＣ５ｓ
＜＜１６４ニュースでやってたな、でもあれってネタじゃねーの？

１６６　名前：名無しのジョニー　２０××／４／１５（Ｔｕｅ）
　１９：１８　ＩＤ：ｅｙＵＵ６ｑｒＸＳｎＩ
＜＜１６５俺も襲われたし、俺の場合は突然相手に噛み付かれて血
が出たｗ
ていうか、あれはガチでやべェ！！

１６７　名前：名も無き詩人　２０××／４／１５（Ｔｕｅ）　２
０：４８　ＩＤ：ｅＲｂｅＣＪｘＹｈＭＷ
＜＜１６６メシウマｗｗｗｗｗｗｗ

１６８　名前：名無しの必殺仕事人　２０××／４／１５（Ｔｕｅ）
　１７：５４　ＩＤ：ｇｌ１ｘｗＧｘｙＣ５ｓ
巻き込まれてんじゃねーかｗｗｗまだ痛むのか？

１６９　名前：名無しのジョニー　２０××／４／１５（Ｔｕｅ）
　１９：１８　ＩＤ：ｅｙＵＵ６ｑｒＸＳｎＩ
＜＜１６８今はまったく痛みは感じないけど噛まれたところがなん
かすげぇ紫っぽい色になっててヤバイ
病院逝った方がいいか？

１７０　名前：名無しの必殺仕事人　２０××／４／１５（Ｔｕｅ）
　１７：５４　ＩＤ：ｇｌ１ｘｗＧｘｙＣ５ｓ
＜＜１６９逝ってこい

１７１　名前：先生、バナナはおかずに入りますか？　２０××／
４／１９（Ｓａｔ）　１０：０４　ＩＤ：ＰｒｅＶａ１ＲＢＣｕ
俺もさっき噛まれました

１７２　名前：名無しの必殺仕事人　２０××／４／１５（Ｔｕｅ）
　１７：５４　ＩＤ：ｇＩ１ｘｗＧｘｙＣ５ｓ
<<１７１おめでとうございます。

「なんだこりゃ・・・・・？こりゃ確実にネタだな」

アホらしくなった俺はパソコンの電源を落とすとさっさと風呂に入って布団に包まって眠りについた。
多分これが俺が安心して眠れる最後の夜になろうとは、俺はまだ知らなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7259y/

屍たちの鎮魂歌

2011年11月21日20時49分発行